



卷 頭 言

農 薬 の 安 全 使 用 と 流 通

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事 奥平洋已
三 共 株 式 会 社 取締役 農業本部長

先日、久しぶりにJRローカル線で旅をした。車窓に広がる水田では、すっかり遅しく育った稲が整然と並んでおり、人の姿はほとんど見えない。昔の風景とは随分変わったものである。

稲作では最も労力を要する除草に、昭和24年には1ヘクタール当り506時間も要していたものが、平成4年には20時間となり、また最近ではフロアブル剤やジャンボ剤が開発されて、更に労働時間が短縮されつつある。

ところで水田除草剤がここまで進歩してきたのは、まず第一に性能の優れた主剤が開発された事にある。雑草に対する活性が高く、稲に薬害が出にくい。勿論、哺乳動物や魚、鳥などにも安全性が高い。少量で効果を発揮するので環境にも影響が小さい。といった大変取扱い易い主剤が開発されたことにより、漸新な製剤の開発が可能になったといえる。同様なことは殺虫剤や殺菌剤についてもいえるが、取扱い易いといっても基本的な注意事項を守り、正しく使用しないと目的とする効果が出なかったり、思いもかけない薬害等の問題を起すことにもなりかねない。農薬は適期に適確な方法で使用してはじめて薬害を出さずに効果を発揮するものだからである。

農薬、特に新規化合物を開発するメーカーは少くとも10年前後の歳月と莫大な費用と労力を費やしており、その化合物を優れた農薬として世の中の評価を得るために発売後も展示圃試験、混用試験、環境モニタリング、科学技術の進歩に合せた追加安全性試験などを実施すると共に、自からの流通ルートに説明書を配布し、勉強会を開き試験的に使用してみる等、常に努力を続

けている。

また農薬メーカー各社は農薬工業会の各種委員会に参画し、農薬に関する知識の啓蒙、安全性評価試験や環境への影響試験に関する欧米先進国との調和について国の諸活動に協力するなどのボランティア活動も行っている。特に近年地球規模で叫ばれはじめた地球環境保護のための諸活動に関しては企業自から目標を定めて取組んでいる。

このように外部からは見えにくい努力の積み重ねの上に成り立っている農薬が、最近ともすれば一般消費財と同様安易に取扱われる傾向があるのは残念である。最近の農薬が安全で取扱い易くなっていることは事実であるが、農薬を使用する人が何の注意もせずに安易に使用することには問題がある。近頃はともすれば、経済性優先、自由競争重視へと走りがちであるが、いよいよ食糧問題や環境問題が現実の問題として我々の前に立ちはだかつて来るであろう21世紀に向かって、農薬の効果を最大限に生かし使用量を極力抑え環境への負荷を削減するよう努力することが、今最も重要と考えられる。

そのためには農薬の適確な使用法の啓蒙が重要になるが、農家との接点となる農協、二次店を中心に系統、商系の流通に携わる方々の役割が益々重要になってくるであろう。しかしながら最近では農薬の低価格販売が優先され、農薬の使用に関する指導についての努力の評価がないがしろにされているように思われる。我々自身の反省も含めて農薬の流通のあるべき姿を見直し、今こそ改善すべき時ではなからうか。